

- わたしの提言
- わたしの講義
- 研究室だより
- 学内トピックス
- 前号を読んで

EF

大学生への宗教教育

保呂篤彦

人文社会科学部研究科准教授

宗教へのネガティブな反応

本学に赴任して2年が経過した。昨年度、初めて人文学類の「宗教学通論」という講義を担当した。この科目は同学類哲学専攻宗教学コース志望者必修の専門基礎科目であり、本来宗教学コースの専門科目への導入講義であって、「宗教学」という学問がいかなる学問であるか、その概要を紹介することを意図している。ところが、「通論」や「概論」と名のつく講義は何れもそうなのかもしれないが、実際には他学類の学生が多く受講しているし、人文学類生の方も、当然のことながら、宗教学コースに進むことを希望していない学生が大半である。こうした学生たちにとっても、「宗教学」や「宗教研究」の概要を知ることがそれぞれの専攻分野でおそらく役に立つのであろうが、授業中の彼らの様子や関心の所在を見ていて、何かそれ以外のことも伝えられないかと考えるようになった。ある種の「宗教教

育」をしてみてもどうかというわけである。

「宗教」を知らずして「宗教学」など可能なはずもないが、一部の宗門校やミッション・スクールを除けば、日本では中等教育において「宗教」に関することを学ぶ機会がほとんどないと思われる。そこで、一昨年本学と縁のある宗教研究者が集まって、その第I部に諸宗教伝統に関する概説を掲載する、宗教学の教科書としては異色の書物(棚次・山中共編『宗教学入門』ミネルヴァ書房)を刊行したのだが、この授業ではこれを用い、「宗教学」という学問についての解説に加え、「宗教」そのものに関する一般的な情報の提供にもかなりのウェイトを置いた。そして学生たちが最も関心を示したのは、世界における宗教紛争や宗教関連の社会問題などを話題にした時であった。ほとんど宗教に接したことがなく、宗教に関する知識もあまり持ち合わせていない彼らが、やっぱり宗教とはそのようなものの

だといったように、ネガティブな情報に反応することが、私には気になったのである。もちろんそれにはマスコミによる報道の強い影響もあるだろう。

「宗教教育」という言葉の意味するところ

ところで、「宗教教育」という言葉は、本来区別される次のような3つの事柄を意味していると言われる。(1) 宗派教育、(2) 宗教に関する知識の伝達、(3) 宗教的情操の教育がそれである。(1)は、私立学校ならともかく、公立学校においては禁じられており、筑波大学においても問題にならないであろう。(2)は、同じ知識といっても、さまざまなレベルの知識が考えられると思うが、一応、教義や儀礼、その歴史などに関する事実の情報であるとしておこう。日本の学校教育ではこれもまた極めて限定的にしか行われていない。(3)は、日本においても最近、子どもたちの間で起こっている自殺やいじめ、社会全体の規範意識の低下などを機縁として、その必要性が主張されるようになってきているが、同時にそれに対する反発も根強く存在する。最近では、例えば、全日本仏教会が一部の政治家に同調してその必要性を主張しているのに対して、関西学院大学の野田正彰教授が、政治家の言う「宗教的情操」は国家神道的なものであるとして、その危険性を訴えている(『中

外日報』2006年10月5日付けの記事、など)。何れにしても「宗教的情操」と言う時、その中味が曖昧であり、どんなものでもそこに読み込まれる可能性があると言うことはできよう。フランスやイギリスにおいても過去に議論されたことがあるが実現しなかった経緯があるという。

さらに、以上の3つとは分類の次元が異なるが、「宗教教育」には、(a)「対宗教安全教育」や(b)「宗教的寛容教育」とでも呼ぶべきものが含まれるとも言われる(菅原伸郎『宗教をどう教えるか』朝日新聞社)。(a)は、いわゆる「カルト」に心ならずも取り込まれてしまう危険に備えるための教育であり、フランスなどのヨーロッパ諸国ではかなり実現しているらしい。(b)も移民問題などを原因としてヨーロッパ諸国で進んでいるらしい。日本でも外国人がさらに増えれば、その重要性は自ずと増してくるであろう。ただ、日本の場合には、「宗教」と「無宗教」との間の相互の寛容ということがより重要ではないだろうか。そしてこの種の寛容の実現のためには、とりわけ、いわゆる「無神論」とは異なるであろう、日本人の「無宗教」が何を意味しているのか、日本の宗教文化史を通して、その由来と中味を検討することが必要であるように思われる。

もう一つの「宗教教育」の可能性

それでは、私が「宗教学通論」の授業を通して試みてはどうかと考えている「宗教教育」とは何か。上記の5つの「宗教教育」とどのように関わるのか。

まず、(1)の「宗派教育」はすでに述べたように問題にならない。

(2)の「知識教育」は大学が学問の場である以上、もちろん最も重要である。これなくしては、「宗教学」も可能でないがゆえに、高等学校までにこの種の教育が与えられない以上、大学でこれを行う必要がある。(ただし、実際問題としては、教科書があるとはいえ、多様な宗教伝統を私一人で適切に教えられるかということ、無理があると言わざるをえないが。)しかし、これは「宗教学」の前提であり、私が上で意図していたことではない。

(a)の重要性はよく分かるが、これも私が意図していることとは異なる。昨年度は「フレッシュマン・セミナー」も担当したのだが、その教員向けオリエンテーションの際、このような指導をこの授業で行うように指示された。この指示は差しあたり適切だと思うが、この種の指導はさらに充実させる必要があると思うし、そうなれば教員個人に任せてしまっておくことはできないであろう。少なくとも現在の私個人の能力で十分にその責を果たせるかどうか大い

に不安である。大学として「対宗教安全教育」のカリキュラムを作ることを考えるべきではなかろうか。

しかし、(a)のような特殊具体的な対策だけでは、それをどれほど熱心に行っても、この問題の対処に対して十分とは言えない。(a)は結局ある種の「ハウツー」の域をでないであろうし、「ハウツー」の有効性には限界がある。この問題により根本的に対処するには、宗教全般に対するより深い理解が必要であろう。そうした理解が欠落している状況でいわゆる「カルト」に対する警戒の必要性だけを述べれば、宗教に対するネガティブなイメージを植えつけることになるだけであり、人間とその生に対するこれまでとは異なる高次のヴィジョンへのアクセスが絶たれてしまうことにもなりかねない。

こうしたことに対処するのに(2)の「知識教育」はそれほど有用ではないように思われる。まず、例えば「世界史」の知識やマスコミによる情報はそれが単なる外面的な知識であるだけでなく、多くの場合ネガティブであり、上述の危険を増幅する可能性があるし、教義や儀礼、歴史などに関する客観的な知識をどれほど積み重ねても、それらが単に外面的な知識に留まる限り、宗教に対する深い理解を生み出すことはできないからである。

宗教に対するより深い理解を得るためには、(一) それぞれの宗教伝統が有する教義や儀礼の背後にある人間観・世界観などの思想、あるいは各々の宗教伝統がそれぞれそれを生きる人々にこれまで知られていなかったどのような生き方のヴィジョンを提示しているのか、それが私たちの生き方や物の見方をこれまでのものからどのように変化させるのか、(二) それぞれの宗教が具体的にどのように生きられているのかに関する情報、例えば、ホスピスやピハラーなどの終末期医療の現場において、キリスト教や仏教がスピリチュアル・ケアの場面で実際にどのような役割を果たしているのか、そこで暮らし、死んでいく人々の人生にとってそれぞれの宗教伝統がどのような意味をもっているのかといったことについて学ぶ必要があるだろう。

さて、私が試みてみてはどうかと冒頭で述べたのは、宗教のこのような局面に関する教育のことである。このような道筋で行われる「宗教教育」は、(1) 宗派教育でも、(2) 宗教に関する単なる知識教育でも、はたまた現在なお論争の的となっている (3) 宗教的情操教育でもない第4の宗教教育として位置づけることはできないであろうか。

しかし、ひょっとするとこれはもはや「宗教」と「無宗教」という区別を越えてしまっているのかもしれない。それはある伝統で

は、またある人々においては、「哲学」や「思想」や「知恵」と呼び慣わされているものかもしれない。たとえば、通常は宗教思想と見なされてはいないアリストテレス哲学における「エネルゲイア」としてのよき生のあり方と、福音書のイエスが語る、「思い煩い」から自由な生のあり方が、同じ「知恵」を表現していないとは断言できないように、私には思われる。「宗教」と「無宗教」との間の寛容を含む (b) 「宗教的寛容」の教育が求められる所以である。

(ほろ あつひこ／宗教哲学)